

-----  
[ 成果情報名 ] 夏秋ギク「優花」の奇形花防止技術

[ 要約 ] 夏秋ギク「優花」の奇形花（貫生花）は、消灯後の昼夜温が30 / 20 の場合には発生しない。6月出し栽培では、消灯後の3週間の最低気温を20 で管理することで、また、9月出し栽培では、消灯後の3週間で遮光率58%の資材を用いて遮光することで、奇形花の発生を軽減できる。

[ キーワード ] 夏秋ギク、奇形花、貫生花、温度、遮光

[ 担当部署 ] 花き部・花き栽培チーム

[ 連絡先 ] 092-922-4958

[ 対象作物 ] 花き・花木

[ 専門項目 ] 栽培

[ 成果分類 ] 技術改良  
-----

[ 背景・ねらい ]

夏秋ギク「優花」の施設栽培は、日長処理によって6月から9月までの4ヵ月間に及ぶ切り花生産が行われている。本品種は7月と8月出し栽培では問題なく栽培することができるが、6月と9月出し栽培では頭花内に総苞片が混入する奇形花（貫生花）が発生し問題となっている。そこで、この奇形花（貫生花）発生に及ぼす温度条件を明らかとし、加温及び遮光処理による奇形花防止技術を確立する。 （要望機関名：八女普（H15））

[ 成果の内容・特徴 ]

- 1．夏秋ギク「優花」の奇形花（貫生花）は、消灯後の昼夜温が30 / 20 の場合には発生しない。しかし、これより昼夜温が高い場合と低い場合に増加する（図1）。
- 2．6月出し栽培における奇形花は、消灯後の3週間の最低気温を20 で管理することで軽減できる（図2）。
- 3．9月出し栽培では、消灯後の3週間で遮光率58%の資材を用いて遮光することで、発らい、収穫日の遅れがなく、頭花内の総苞片数を減少させることができる（表1）。

[ 成果の活用面・留意点 ]

- 1．夏秋ギク「優花」の品質向上技術として利用できる。
- 2．6月出し栽培における加温終了時期は、発らいが揃った時期までを目安とする。
- 3．9月出し栽培における遮光処理は、雨天や曇天日が続く場合、切り花重量の低下を招く場合があるので、晴天時のみの遮光処理とするか、遮光程度を低下させるなどの対策を行う。

[ 具体的データ ]

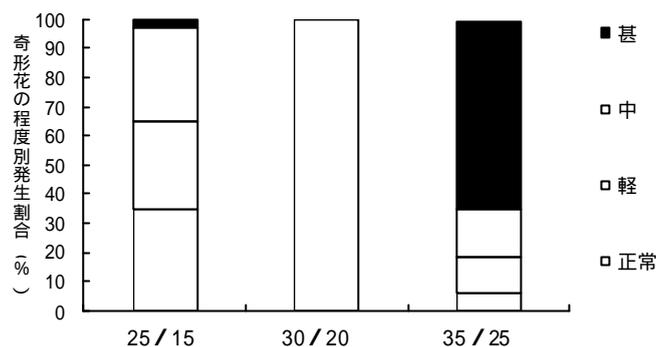


図1 消灯後の昼夜温と奇形花 (平成15年)

注) 1. 定植 4月30日、電照期間 4月30日～6月10日、開花期 7月下旬～8月下旬  
 2. 奇形花 (眞生花) の程度は、頭花内の総苞片数が0～25枚を正常、26～50枚は軽、51～100枚を中、101枚以上を甚と分類

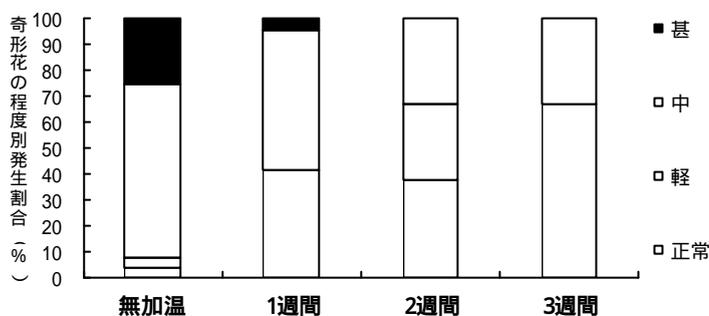


図2 6月出し栽培における消灯後の20日加温期間と奇形花 (平成16年)

注) 1. 定植 3月11日、電照期間 3月11日～4月18日、開花期 5月下旬～6月上旬  
 2. 電照期間中は無加温で栽培し、消灯日 (4月19日) から最低気温を20℃で上記期間を加温、換気温度は25℃で管理。  
 3. 奇形花 (眞生花) の程度は、図1と同じ基準で分類。

表1 9月出し栽培における消灯後の遮光期間と切り花形質 (平成16年)

消灯後の遮光時期	発らい日	収穫日	茎長 cm	重量 g	頭花内			奇形花の発生割合 %
					舌状花 枚	筒状花 枚	総苞片 枚	
無遮光	8/26	9/12	69	78	354	2	17	15
1週間	8/25	9/12	70	68	335	1	12	0
2週間	8/25	9/12	72	71	323	2	10	0
3週間	8/25	9/12	72	68	322	2	6	0
4週間	8/26	9/13	74	62	319	2	5	0

注) 1. 定植 7月5日、電照期間 7月5日～8月5日、開花期 9月上旬、プランターによる無摘心栽培。  
 2. 電照期間中は無遮光とし、消灯日 (8月6日) から#610番 (68%遮光) の寒冷紗でハウス外側を上記期間、遮光した。  
 3. 奇形花の発生割合は、頭花内の総苞片数が26枚以上の個体の割合を示す (N=20)。

[ その他 ]

研究課題名：夏秋ギクの奇形花防止技術

予算区分：経常

研究期間：平成16年度 (平成14～16年)

研究担当者：國武利浩、松野孝敏、坂井康弘、谷川孝弘、黒柳直彦、巢山拓郎